

#4. 復唱することの価値（その1）

ジェイナ・トキエ・タナカ

私は学生たちが教室に入ってくると彼らに声をかける。私はたいてい「今日の調子はどう」と言い、彼らは決まって「いいですよ。先生はどうですか」と答える。彼らはタイミングよく挨拶を返してきて、私も「いいわよ」と答える。学生が素早く返事をするのでできるのは、「調子はどう」という私の問いかけを聞いて同じ返事をするのを何度も繰り返したために、言いよどむことがなくなった——そこには問われたことを実際に考える暇いとまなどない——結果である。私たちの会話は大方このようなものである。問いを聞いた後、私たちはたいてい返事にはそれほど時間を要しない。それは、たぶん、日常生活で問われることへの返事には迷うほどの選択肢があるわけもなく、単に「はい」「いいえ」あるいは「わからない」で事足りてしまうかもしれないからだ。こうした定型表現の学習と練習の繰り返しは、今日では古臭いことのように思われるが、日本の英語を学習する学生たちが英文法の基本的な規則、例えば、英語のセンテンスには主語が必要だという第1番目の規則をむりやり理解させられることなしに自分の頭脳の一部にしてしまうには、最良の方法のように私には思える。

以前のコラムで書いたように、復唱と反復練習は私の日本語学習の初期段階ではとても役に立った。私たち学生が暗記しなければならなかった日本語のセンテンスの一部は注意深く解説され、英語に訳されてさえいたが、私たちが英語から日本語への翻訳をさせられたことはなかった。「明日、ワイキキに行きます。」というセンテンスは英語で「I'm going to Waikiki tomorrow.」という意味だということを私たちは単に事実として受け取っていた。実はなんと私はずいぶん後になるまで、多くの日本語のセンテンス、特に会話で使われるセンテンスに主語がないことを理解していなかった。暗記したセンテンスが自分の言いたいことを伝えてくれればそれで十分だった。

英語のセンテンスには必ず主語が必要だ、言い換えれば、自分たちが使う英語のセンテンスにも主語が必要だということを同様の方法で日本の学生に理解させられるように思う。私がこう言うのは、6年間英語の授業を受けた後でさえ、英語のセンテンスには主語が必要だということがわかっていない学生がたくさんいるからである。（他の学生より年かさで、数10年間英語を使っているが、話しているときどき主語を落としてしまう学生が何人か実際にはいるけれども。）まさに習い始めのころに完璧なセンテンスを復唱することは、ちょうど私がそうとは知らないまま、日本語ではしばしば主語が必要ないと理解したのと同じように、センテンスを作る際に自然に主語を使えるようになるのに大いに役立つのではないかと思う。参考までに、私が日本語を習っていたときの簡単な表現の一部を変える練習は次のようなものだった。斜字体で書かれているのは、教師代わりのヒントで

ある。

A：私は学校が終わったら帰宅します。

彼女

B：彼女は学校が終わったら帰宅します。

彼

C：彼は学校が終わったら帰宅します。

昼食が済んだら

D：彼は昼食が済んだら帰宅します。

誰が

E：誰が昼食が済んだら帰宅しますか。

マヤ

F：マヤが昼食が済んだら帰宅します。

学生はセンテンスの一部を変えなければいけないので、単に繰り返すだけではなく、どうやってセンテンスを作るか考えなければならない。しかしながら、同じ練習を十分に繰り返し、さらに他の場面設定での同様の練習を繰り返す機会があれば、以前難しかったことでも自然にできるようになるはずだ。重要なのは復唱することである。この種の練習は、たった一度きりしかやらないのなら役に立たない。こうやって復唱することで、英語のセンテンスには主語が必要だということを大した苦もなく身に付けることができるのだ。

言語学習とは無意識で口に出てくるまで同じセンテンスを繰り返して言うことに等しいのであるが、中には反復練習と復唱は退屈で子供っぽいと思う人がいる。もちろん退屈であり得るし、子供じみて見えるかも知れない。言語の学習は簡単ではなく、私たちが目にするある英語学習用 CD の広告が約束することとは違って、英語で話している人が言っていることを聞くだけで英語が流暢になることはあり得ないのである。練習に次ぐ練習が、英語を流暢に使えるようになる唯一の道なのだ。